

〔「連続・反復の美」展によせて〕

連続する文様と反復された図像の展開について

連続文様の歴史を遡ると、新石器時代の馬家窯文化の彩陶に斜線や曲線を重ねる幾何学文様を見出せます。《彩陶双耳壺》(図1 中国・新石器時代)は胴上部に力強い線による渦を巻く様子が描かれます。渦文は円形を基にして、終わり無く続く連続線によって作られる最も基本的な文様であり、様々な文化、地域、時代に見られます。これら渦文や雲気文、雷文、卍字文様など旋回する線文様は、次の唐草文様の出現へとつながります。

唐草文は植物が波状に展開しながら連続する文様で、ギリシアに起源を持ち、中央アジア、中国を通じて朝鮮半島や日本、東南アジアなど広く伝えられました。仏像や経典の荘厳にも用いられ、《石造釈迦如来坐像》(図2 中国・北魏時代 延興二年(472)銘)では、釈迦如来坐像は背後に火焰光背を伴い、正面には供養菩薩や如来坐像が火焰の中に表された崇高な姿を見せ、側面は生き生きとしたバルメット状の唐草文で装飾されています。中国では七世紀にはバルメット唐草が主体でしたが、八世紀には文化の高揚と豊かさという時代性を反映した、宝相華や柘榴、海石榴華などの植物の他、狻猊(獅子)や鳳凰などの動物とも組み合わされて装飾性の高い華やかな唐草文が完成されます。唐草文の波線には永遠に続く豊かさへの願いも込められていたことでしょう。

また、仏教とともに広まった蓮華は清浄さとともに生命力のシンボルで、蓮唐草文は生命の再生を意味します。海獣葡萄鏡に見られる葡萄

唐草文は子孫繁栄を意図するように、唐草文は装飾的な美しさとともに、結びつく植物が持つ吉祥のシンボル性を強める役割をも果たします。宋時代には牡丹の愛好とともに牡丹唐草文が生まれ、陶磁器など工芸の意匠に多用される他、建築意匠にも用いられます。『营造法式』(北宋・崇寧二年(1103)刊行、李誡編纂)には、建築意匠の中に「卷葉華」として数種類の唐草文が掲載されています。元時代以降には菊や椿など様々な現実の花が取り入れられ、《青花双魚文大皿》(展覧案内下左図)には異なる季節の花が組み合わされ、四季を繋いで連続と続く吉祥性が込められています。

唐草文が幾何学的に変化した文様に屈輪があります。藤形の渦文が連続する文様で、南宋時代以降の犀皮(堆黒、堆朱)や寺院建築の意匠に見られます。《堆黒屈輪大盆》(中国・元時代)は黒漆の間に朱漆を二層挟み、斜めに文様を彫り込んでいるために、彫り込み部分には黒と朱の繊細な縞が現れ、屈輪の曲線は多層状に重なり、水波の広がりのような美しい効果を出しています(図3)。

唐草文が様々な展開を遂げる一方で、元時代には陶磁器などの文様に人物図や物語図が増え、唐草文や植物文などの連続文様は主文様ではなく副次的な位置に表されるようになります。そのような過程で、装飾的かつ連続性を保った幾何学紋様が新たな吉祥文様として現れます。

唐草文だけではなく、連続する

文様には良いことが続く吉祥の意味合いが込められます。卍字繋ぎ、七宝繋ぎ、亀甲文など、宋時代以降には多様な連続する吉祥の幾何学文様が生み出され、工芸意匠にも盛んに用いられています。このような文様は東アジア文化圏では共通の意味を持って広がります。日本の茶人に好まれた明時代末期の景德鎮民窯で焼造された青花及び五彩磁器である「祥瑞」には、全面に幾何学文様を施す図案が見られます。亀甲花詰文、網文、青海波、雷文など吉祥の意味を持つ連続文様は、国や地域の文化や愛好を反映して様々な展開を遂げます。

仏教において、形の反復(複製)は重要な意味を持ちます。型を用いる造塔・造仏や型や版による印仏・摺仏などの仏教版画は、仏像が並置、或いは反復される点に特徴があると云えます。仏像や塔の形を写し、同形を造ることにより、原像に備わっている靈性や聖性をも写すことが可能だと考えられたからではないでしょうか。

型を用いる造塔・造仏には土(泥)や金属など様々な材質があります。同形の如来像が多数並置された彫塑像や絵画・版画は、過去・現在・未来の三劫のうち、特に現在の賢劫である千仏をあらわしていると考えられ、アジャンターや敦煌などの石窟壁面にも認められます。《千体仏》(図4 中国・唐時代 個人蔵)は、半立体の如来坐像七体が七列配置された鑄造製の金銅板で、同じ思想的背景が認められます。土(泥)を用いる埴仏(中国では「善業泥」や「脱塔」「脱佛」「拓(脱)模泥像」の呼称がある)・西アジアやチベットの「擦擦」等は独尊や三尊像、諸尊像など様々な図像が

あり、同じ図像の小半肉像が多数製作されます。型を用いるため、安価で容易に大量生産することができ、塔内に安置したり、石窟や仏龕内を荘厳するために用いられ、また、小型で持ち運びが可能であるために、念持仏としても使用されたと考えられます。《大日如来像凹型》(図5 日本・平安時代 黒川古文化研究所蔵)は埴板の表面に《大般若波羅蜜多經》(唐・玄奘漢訳)の一部が刻まれ、裏面は宝冠を被り法界定印を結んだ胎藏界大日如來の姿が型押しされます。図像部分が窪んでおり、埴仏を製作するための範型とされてきましたが、表面に経文が刻まれていることから、瓦経の背面に大如来像を押捺したとの見方もあります。所謂「埴仏」とは凹凸が反転しますが、仏の図像を写す点では同義であり、次にみる経典等の紙背に印仏する行為に通じます。

印や版を用いた仏教版画のうち、スタンプ状の小型の型を押捺しているものが「印仏」、大型の版を用いて摺りだされたものが「摺仏」と大別されます。個人で印仏を行う場合もあり、僧侶が中心となり勧進し、人々の結縁を求めて製作されて仏像の胎内に納められる例もあり、印仏や摺仏が製作される状況も様々です。日本で平安時代末期に多くの貴族が行った日課印仏は、毎日欠かさずに印仏を行うもので、その継続する行為が作善とされました。《如意輪観音像印仏》(展覧案内下右図 日本・南北朝時代)は如意輪観音像を二段に印捺し、真言などが墨書されています。同類の作例より、延元三年(1338)に真海阿闍梨の日課供養として行われた印仏です。如意輪観音は六臂で火焰光背を伴い、蓮華座上に半跏で坐します。墨の濃淡にムラがあり、線が途切れている部分もありますが、数多く印捺された為と見られます。日々印捺された観音像が連なる様子に信仰心が表れています。

型による造塔・造仏は形を写し、大量に製作できる比較的容易な方法であり、同時に、広く民衆にとっても身近に行える大衆的な作善の方法であったといえます。(瀧朝子)

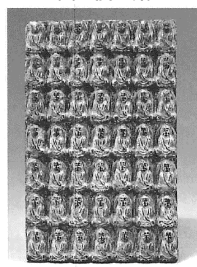
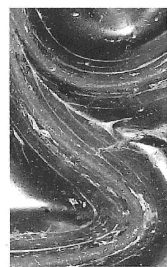
図2 側面

図3 屈輪文様部分の拡大

図4 個人蔵

図5 黒川古文化研究所蔵

図1



季刊 美のたより No.187

平成26年7月15日

発行 大和文華館